

第4回 四万十町立図書館十和分館整備検討委員会 会議録

1. 日 時：令和7年3月24日（月）19:00～21:00
2. 場 所：四万十町役場十和地域振興局2階ホール
3. 参加者

出席者	委員	四万十町立小中学校長	山本 千代
		四万十町立小中学校 PTA 連絡協議会 十和地区会員	山本 卓
		四万十町立図書館協議会委員	刈谷 明子
		十和まちづくり推進協議会委員	栗原 あゆみ
		四万十町社会教育委員	松下 正明
		公募による者	田頭 誠志
			酒井 紀子
			平野 彩
役場	生涯学習課	課長	今西 浩一
	十和地域振興局	局長	富田 努
	(事務局) 十和町民生活課	課長	畦地 永生
		副課長	林 誠
		主査	吉良 正史
		主任	松下 理恵
	異動により来年度 関係する者	国民健康保険大正・十和診療所事務長	吉川 耕司
		地域包括支援センター大正・十和支所長	池田 康人
欠席者	委員	四万十町立小中学校 PTA 連絡協議会 十和地区会員	芝 伸介
			久保 卓也

4. 日程（1）開 会
 - （2）十和町民生活課長挨拶
 - （3）議事①望ましい設置場所について（その理由）
 - ②望ましい規模感について
 - （4）その他
 - （5）閉会
5. 配布資料（1）次第
 - （2）第2回四万十町立図書館十和分館整備検討委員会 意見まとめ
 - （3）四万十町立図書館十和分館整備検討委員会設置要綱（再確認用）
 - （4）とおわと育つ会通信 NO49 最終号（R7年3月号）

6. 議事

（この要旨については、ご意見や回答の趣旨を損なわない範囲で、わかりやすい表現に修正等を行い作成しています。）

報告事項など

- ◆十和町民生活課長挨拶
- ◆異動に伴う挨拶
- ◆意見書提出について
- ◆検討委員会終了について
- ◆旧小鳩保育所での図書サテライト貸出委託業務について

（酒井副委員長）先日、新聞で梶原の地元の中学生の梶原高校への進学率が9割らしく、その理由の中に「図書館があること」が明記されていたんですよ。そう考えると、梶原町図書館には食事ができるようなカフェが併設されているじゃないですか。地元で根差して、四万十高校に行くように促すためではないですけど、結局地元で定着しているとか、愛着がある図書館である場合、色んなものや他の機能とくっついているとよいのか。それとも学校とだけくっついている感じでイメージしたらいいのか。まったく決まっていなくて分からない。

（田頭委員長）この意見書の1番で、四万十町立図書館十和分館の新築整備を求めているということですので、基本的には「図書館」ということですね。ただし、図書館としても、今は飲食ができるようなコーナーがあったりとか、そういうものも図書館の中には含まれてますので、そこら辺はある程度緩やかではあると思いますが、施設としては図書館という考えです。学校に併設した図書館という考え方です。

（酒井副委員長）その図書館に多目的室がついてるとか、そういうことまでを言ってもいいですか？

（田頭委員長）図書館機能の中に含まれていると思いますので、そういう部分は意見として出していただいて構わないと思います。

（栗原委員）今、旧小鳩保育所を運営していて感じることもありますが、利用者に利用目的のアンケートを取るようにしていて、やっぱりコミュニティであったりコミュニティスペースを求めているというのが一番になります。ただ、コミュニティを求めて来ているけど、そこに本があることによって話が盛り上がり、図書につながって情報の提供までいけるような利用が多いなと感じています。個人的には生活動線の中にどう本を置くかだと思います。彦市で買ったものを、冷蔵庫が図書館にあって、そのまま本を見られるとか、子供に本を読んであげたり、外や中庭・室内でも運動など動けるスペースや、子供スペースがあったりとか。館内でおかみさん市のものが自販機で買えたり、地域の商品がそこで買えて食べられるとか、コインランドリーがあるなど、田舎の小さな複合施設みたいな感じで、それがより生活に近づいている状態のところであれば、本を利用する動線ができると思います。最終的には、本を手にと

ってもらって情報格差をなくしていったりとか、情報を届けるってところが、図書館的にはメインになるのかもしれないですけど、そこに持って行くための入り口みたいなのは別であってもいいのかなと考えています。

（田頭委員長）来館動機というか、そういったものが、最初は本だけではなくてもいいんじゃないかっていうことです。自然の流れで来てくれた方が、本と偶然触れ合ったりというようなことです。

（酒井副委員長）広島にあった施設だったかと思いますが、その人に聞けば困りごとがすべて解決するじゃないですが、町の施設を通じて、「プリンターが壊れたけどどうしたらいい？」って聞いたら電気屋さんを教えてくれもするし、簡単な修理ならその本を見たらいいよと言ってくれるようなところが話題になっていた。例えば、子育て世代が診療所が機能していないから困っているということに対しても、どこに行けばいいかわからないという場合、分館に相談する人がいることが分かれば、レファレンスの幅が広がる。実際イタリアの図書館では、NPO の窓口があり、相談できる。役場に行けばいいと言われるかもしれないが、行きづらかったり、誰に聞けばいいか、誰に伝えればいいかわからない。誰に聞いたらいいかまでを受け付けてくれるところがあれば、心強いかなと思う。

（田頭委員長）本であつたりとか、そのパソコンであつたりというような物的なサービスだけではなくて、人的なサービスの充実も備わっていたらということでしょうか。

（酒井副委員長）それは子どもたち以外の利用者に対してもだが、子どもたちに対しても、学校図書館の司書がいないと、学習指導要領と繋げた図書の紹介ができない。せっかくいい施設であっても、人が充実しないと機能しないということが起こり得ると思うので、ぜひそういったところも検討していただけたらいいかなと思う。

（田頭委員長）ここで材料として出しますが、四万十町立図書館の管理規則（教育委員会規則）の第2条に「図書館は、図書館法第3条の規定に基づき、次に掲げる事業を行う。」とあり、1番には当然「図書を収集し、住民の利用に供すること。」とありますが、例えば4番には「読書会、研究会、観賞会、資料展示会等の主催及びその奨励を行うこと。」といったことも載っているわけです。なので今お二方が言われたようなことなんか、十分に図書館がやるべき事業として、四万十町の教育委員会規則で規定されているということです。結構幅広く、従来の図書館を倣っているだけの図書館というイメージは、払拭していただいて、色々出していただければ、それも十分に今決められている四万十町の図書館の事業範囲内に大概が収まってきます。

（松下委員）年齢や性別や職種を問わず、いろんな人の価値観が多様性の時代である。例えば、本や読書は教育にも意味があるし、大事なものだが、一方で「私たちは図書館なんか行かず、本も読まずでやってきた仲間がいっぱいいる」ということを公言する公人の方もいらっしゃる。要は価値観がそれぞれ多様化している。多様な価値観に対応するような、要するに多様性を重視できるような図書館で、その中心に本がある。そのような図書館を作るにはどんな機能があつたらいいだろう。単純な話、本が好きな人も嫌いな人もたくさんの人が来られて、その施設を利用できる、そういう施設を作るべきだと思います。行政的に言ったら、税金をかけて作ったが、年間これだけしか利用していないんじゃないかという話が最終的には出てくる。そうすると、こういう人口の少ない町で、本の好きな

人だけをピックアップして、そこを使うとなると、どうしても少なくなるのは当然だと僕は思います。やはり、これだけ利用者が多いですよというカウントをあげないと行政施策として失敗に終わる。失敗と言われても仕方がない。そして、多機能でおしゃべりしたい人や、自分で受験勉強したい人や、本を読みたい人や、研究会したい人や、いろんな相談に行きたい人が、いろんな人が集まるような多機能な図書館を作りませんか？ということから話していくと、多目的室がいるねという話になる。音を出しても怒られないような、音楽できる防音設備の部屋が一つあればなど。そんなことで段々と機能が出てくると思います。せっかくなので是非とも様々な人の価値観を満足させる多機能な図書館を作る。本がもちろん中心になるが、いろんな意見を言ってもらったらいんじゃないかと自分では思います。

（栗原委員）同じようなことを言っているが、今は多様性の時代で、それぞれ趣向が違う。十和の中で、本が好きな人と言ったら、もうすでに範囲が少ないと思う。その十和全体のパイをどうとっていくかみたいなところだと思うんですが、今は AI になんでも聞くみたいな時代になっているが、その逆張りというか、AI の機能が地域にあるみたいな、人に置き換わっていくみたいな、その地域の課題を何を持っていても、次の道なのか、何かが見つかるみたいな。そういったものがあれば、それなりの十和地域のパイがとれるのかと思う。目的としては何を持っててもいい場所に本がある形がいいのかと思う。

（酒井副委員長）私たち（育つ会とおわ）の活動におたすけスマホがあり、高齢者の方が相談に来られる。例えば、移動の援助などは近しい人に乗せていてもらいたいというのがあり、なかなかニーズが出てきにくい。お助けスマホとかスマホサポーターの場合、他人に教えてほしいところがある。自分の娘とか息子には、そんなこともわからんのかと言われるから。結局その時にそのちらっと本が見えたり、雑誌が見えたら、ここにはこんな雑誌があるのかとか。そもそも新聞が高知新聞しかないと思っている人もいる。入り口はいっぱいあったほうがいいかと思う。

（平野委員）図書館ができればそうなるだろうとは思いますが、土日は必ず開けてほしい。土曜日は行事やお医者さんに行くことも多いので、図書館を1日たっぷり利用したいなと思ってなかなかできない。できれば祝日もあけてほしいが、日曜日は必ず開けてほしい。

（今西課長）月曜日と祝日、年末年始が今の四万十町立図書館の休館日となっている。

（田頭委員長）松下委員からも出ましたが、多様性を重視した図書館。ほかの委員からも出たが、色々な趣向にも対応できる図書館。要は多くの人が行きたいと思うような来館動機をいろんな方面から持てる図書館がいいんじゃないか。その流れの中で、偶然本と触れたり。できるだけ多くの来館者、これは大正図書館なんかも言われているところなんじゃないですかね。図書館の来館者数をもう少し増やした方がいいんじゃないかなど。

（今西課長）先ほど申し上げた通り、行政的にはやはり利用率みたいなところでしか見られるしかないなので、どういう形で多くの人に利用されている施設かだと思います。幅広く利用していただいたら、それは設置した意義があったということだと思います。

（田頭委員長）基本的な考え方の中で、多様性を重視し、多くの趣向に対応できるような、そういう部屋であったり、図書館であるというような考え方。それによって、多くの来館者を惹きつける。そういうようなものを作りたいというようなことでよろしいですか？

（山本千代委員）多様性の重視で、たくさんの人が集まるのは賛同します。でも、学校図書館と併設となった時に、緩やかにたくさんの人が集まってきて、興味を持っていきいたいというイメージと、従来の学校図書館はカチッと本を探しに行くというイメージがあるので、そこらへんの折り合いや調整が難しそうだなと。漠然としてるんですけど、どんな風になっていくのかなと。いろんな機能を持たせると、たくさんの方が集まってはくる。でも、学校図書館と併設ってなった時に、どういうハコモノを作っていくかっていうのが、すごく難しいんだらうなって思いました。

（刈谷委員）懸念点はそこで、今度できる施設は十和にできるので、管轄としては地域振興局におそくなりそうですよね。サービスとしては全市民を対象としているので生涯学習課で、学校図書館としての役割は学校教育課になると思います。大正分館みたいに一般的な十和分館だけを作るのであれば、比較的それぞれ多様性のあるもので、サービス内容は決めやすいと思うんですけど、そこに学校図書館の役割が入った時に、もう一つ柱が増えるわけなので、学校図書館と公共図書館の役割をどういうふうに両立していくかっていうためのビジョンは必要だなと思います。なので、学校図書館が必要とする役割と公共図書館が必要とする役割が、両方きちんと担保されるようなものにしていく必要があります。オーテピアが合築になった時に、県立図書館と市立図書館の持つべき役割は全く違うので、すごく時間をかけて検討して、今こういう形になっています。ただ十和の中に図書があるスペースを一つ作りますっていうことだけではなくて、さらにその分館を作りますっていうだけではなくて、すごく複雑な話し合いや、時間をかけないといけない項目っていうのは、普通よりも必要なんじゃないかと思います。学校教育を支える部分の学校図書館、公共の社会教育を整える部分での役割、それぞれビジョンを持って、この一つの施設の中でどのようにやっていかは大事にしてもらいたいなと思っています。

（田頭委員長）現行の規則上で見ると、公立の図書館は教育委員会の生涯学習課が所管。十和にできても、それは図書館の分館ですので、生涯学習課が所管課になります。学校図書館の方は学校教育課が所管となるので、いずれも教育委員会です。教育委員会内部での学校教育課と、生涯学習課の話し合いによってスムーズにできると思います。十和地域振興局は、設置するために動くこともあるでしょうけど、まずは教育委員会の内部の生涯学習課と学校教育課とのすり合わせというふうになっていると思います。先ほど出たように、児童生徒が活動する、教育活動として使うスペースの問題もあるでしょうし、運営の問題にも関わってくると思いますが、ここはもう先行事例なんか結構あるんじゃないかと思うので、そこら辺を十分に見て、参考にしてやっていけば、児童生徒の教育活動を阻害することなく、地域の方にも利用されると思います。地域の方とはもちろん、児童生徒が交流するような、そういう場も作ることができるんじゃないかなというふうに思いますが、いかがでしょうか。

（松下委員）校長先生は学校の管理や子供を扱ってる面ではやっぱり心配な面もあると思います。そこは管轄や法規則の問題以外に、現場としてやっぱり心配な面は考えられますよね。でも今、委員長言われたように難しい面もあるけれど、全国的にもあちこちでこういうことが実際行われてるじゃないですか。各規則の問題や現場での

コントロール等も乗り越えて成立しているところがたくさんあります。なので、これは視察で、いろんな意見を聞いて、先行事例を聞いて、ここではこういう問題があった、これが大変だったということも全部教えてくれると思います。せっかくならば、一番先を走っているところ、大変だったと思うけれども、一番最初じゃないので、いくらでも先行事例あるので、視察を繰り返して、具体的なイメージを持てば、僕は解消できると思います。知らない者同士が集まっても、それは不安ばかりなので、視察をして具体的に進めたらどうかと思います。

（田頭委員長）視察によって、成功点だけではなくて、失敗点・課題点なんかも多く収集して、それを生かしていけばいいんじゃないかという意見ですね。僕は教育委員会と十和地域振興局で視察に行っていて、いろいろと見るのもいいんじゃないかなというふうに思います。

（刈谷委員）公共図書館に関しては今新しいところもたくさんできているので、先行事例などもありますが、学校図書館に関しては、四万十町全体で標準とされるものはない。一昔、二昔前の学校図書館というものがずっとずっと今まで引き継がれているってことがある。学校図書館の今のスタンダードっていうのは、これから関わる人たち全員の中で持っておく必要があるなと、すごく切実に思っています。

（平野委員）学校図書館と公共図書館が一緒になるというのがどれくらい大変なものかわかっていないが、学校図書館ができて、保護者として見えるようになるのはすごくいいことだと思う。どんな本を読んで勉強しているのかなとか、学校でこの間これ見て勉強したよという会話にもつながっていくイメージが私の中でできあがっています。地域の人たちがこの場で学んでいたり、本を読んでいる姿を子どもたちが見られること自体もすごくいい。そういうイメージがかなうような建物・施設になっていったらいいんじゃないかなと思います。

（山本卓委員）小中併設ということで、子どもが通っていたら通いやすいが、卒業したりすると、孫とかがいないとなかなかパツとは入りづらいと思う。そういう時に、図書館までの侵入経路など、誰でも入りやすいように整備してもらえたらいいと思います。

（松下：職員）私も刈谷委員が言われたように、学校図書館と公共図書館を一緒に整備するにあたって、コストを削減できるっていう部分ばかりに目を向けるんじゃなくて、それぞれの機能っていうのは大切にしたい。学校図書館っていうのはやっぱり学校教育課が担当になる部分でもあるので、そういったところはそれぞれ生涯学習課と学校教育課で役割分担をしながらちゃんと協議して、それぞれの機能をしっかり担保できるような施設にしていきたいなと考えています。視察に関しても、今どこに行くと確実なものはないんですけど、学校図書館と公共図書館を整備しているという事例もあるので、そういったところに視察に行って、それぞれの課題や運営面の課題はかなりあると思うので、しっかり聞いて、十和分館に生かすということにしていきたいと思っています。

（田頭委員長）意見書「3.十川小中学校の学校図書館との共用を望む。①人口減少が進むなか、十和地域における図書館機能の集約化により、選書・蔵書の質量、提供するサービスの維持とコストダウンを図る。」というところ。学校図書館の運営・選書・蔵書・図書の整備は現状どうなっているのかというところです。学校図書館が

結構貧相だと言われても、選書・蔵書・図書の整理・運営、これに関わる人員が配置されているのでしょうか。厳しいのが現状です。

（山本千代委員）うちの学校図書館もそれこそ刈谷さんたちの支援を受けながら、図書館の環境を整備していただいて、四万十町の中でも結構充実・整備されている。選書にしても、教員がカタログを見て、こんなの買おうとか専門的な知識を持って選書しているかっていったら、そうではない現状がどの学校にもあると思います。本の整備・修繕等もなかなか教員が日常的にできることはありませんし、そういうところも、うちの学校はボランティアの方に助けていただいてやっと維持できているような状況です。やはりそういうところに専門の方が入っていただける。今回のこの新しい図書館ができることで、きちんとした専門の方が学校図書館にも関わっていただけるようになれば、随分と変わっていくんじゃないかなというふうに自分は思います。さっき自分が言ったような難しさはあるけど、ある意味、今まで不可能だったこととか、困難だったところを、これができることでプラスアルファになったり、うまく融合できたらいいなというイメージは持っています。学校図書館っていうところはあるけど、地域の人がたくさんそこに来ているという一つの機能があれば、図書だけではなくて、総合的な学習とか、いろんな教科の学習活動の中で、図書館に集まってきている地域の方とつながることもできたり、人と繋がる場となれば、学校教育のいろんな学習の中身も充実して、理想的に発展できるかなと思います。子供たちって結構今、タブレットとか、そういうものと向き合う時間の方が長くて、生身の人間と言葉を交わす機会が非常に少なくなってきているので、逆に人とつながる場にもなるので、両方の機能も大事にしながら、そこをうまく融合させれば、地域の人にとっても子供たちにとってもプラスアルファで、すごくメリットがあるんじゃないかなって自分は思います。ただ、先ほど言われているような先進的なものを自分が見てないので、また調べてないので、ぜひそういうものを調べて、そういう先行事例を見ながらより良いものにできれば一番いいんじゃないかなと思います。

（田頭委員長）この点、昭和小学校だけではなくて、高知県内の小学校、他府県もそうだと思いますが、厳しいところが多いと思います。県によっては図書館司書を何校かで配置しているようなところもありますけど、現状は非常に多忙な教員が図書館の運営・整備に携わるというのが現状です。四万十町内の場合はそうですけど、そこを今後の教職員が減っていく中で、どうやってそのサービスを維持向上させるのかというと、やはり公立図書館と一緒にすることで、専門的な知識を持った、物理的にも多少人数が増えるというところで運営を維持できる、あるいは新たな取り組みができるのではないかなというところも含まれていると思います。校長先生が言われたように、学習活動につながるきっかけとなるような出会いなんかも図書館で起こりうるのではないかなということですね。意見書の『②学校施設の「開放」ではなく、「共用」により、地域と学校、世代間交流のきっかけとする。』というところはまさに今、校長がおっしゃられたところじゃないかなと思います。

（松下委員）校長先生がそういうメリットがあるんじゃないかということですが、僕はメリットしかないと思います。逆にリスクはもちろんあります。例えば現場で言ったら、一番のリスクは児童生徒の安全管理です。多様な人と接触する空間ができる可能性があるわけなので。児童生徒の安全管理っていうのは一番気になるところですよ。そこはリスクなんですけども、それは管理できるマネジメントできるリスクだと思います。地域の人でも学校が閉校して行って、寂しくなってくる中で、地域の人でも子供たちとここで接触できる。これは高齢者の方にとっても、生きがいや喜びを味

わえる生涯活動で、子供にとっても体験学習っていうことを考えると、遠いところに行かなくても、地域の人に来てくれる。山本委員が言われたように学校に行くと行って言ったら、敷居が高いからなかなか行きづらいけども、そこを学校じゃなくて、図書館だと。それも柔らかい名前の「CUE キュー。」みたいな名前や愛称をつけたら、むしろ敷居が低くなる。そこに飲食機能やイベント室やら、受験勉強できる自習室やら、そんなものを入れていったら、そこで融合できて、あとはリスク管理だけ。みんなにとってメリットしかないと思います。どうやってリスク管理するんだということに関しては、先行事例を聞いていけば失敗事例が分かるし、恐れる必要はなしと思っています。

（田頭委員長）考えられるリスクはあるんだけど、得られるメリットがかなり大きいんじゃないかというような話ですけど。あとは生涯学習課のネーミングのセンスが問われるところですね。

（栗原委員）文化的施設の時もそうでしたけど、文化的施設がイメージできない人にとっての文化的施設の文字の重みってすごいあるんですよ。図書館がいない思ってる人に、図書館っていうワードを届けるのは難しい。だからアナウンスする時から、仮の名前でも、ワクワク感のあるイメージを大事にしていきたいと思います。

（田頭委員長）そもそも図書館というイメージが、旧来の図書館のイメージを持ってる人も結構いるので、これは「あんまり行くとこじゃないなあ」とか「静かにしとかなないといかんとこやな」とか、そういうのが先行してしまうことは大いに考えられるところですね。「俺には用事がないから」とか、そういう部分はおそらく出てくるかなと思います。そこをいかに打破していくか、払拭していくか。

（栗原委員）学校の図書館の併設のことでもいいですか。去年、長野県の小学校の司書をされている宮澤さんという方が、ここで講演された時に、学校の学習単元を事前に知っておいて、図書館が学校にお願いされる前に本を用意していて、お願いされたらすぐ送れるようになってるとおっしゃっていた。連携もプロだからできることがあるので、それを十和分館でもやれたり、そこを起点に四万十町全体に発信できるものがあつたら、先生たちも楽になりますし、プロの仕事ってそういうところで必要とされているのかなと思います。学校図書館と公共図書館が連携するけど、学校図書館の機能っていうのはしっかり残した形であってほしいのと、安全面は私も気になるんですけど、それは運用でカバーできるかなと思います。学校が図書館を使って何か調べものをするときに、安全面を考慮するのであれば、毎週この時間は学校が使うので、一般の人にはまた後で開放しますといった時間で区切るなど、運用面でカバーできる場所もあるんじゃないかなと思います。

（田頭委員長）スペースを区切るとか、時間で区切るとか、工夫によってそういうことでも可能かなと。

（松下委員）実際そうやっているところが結構あると思う。体育施設も併用になっているところがあって、学校の体育の授業優先で、そこから後の時間帯を町民が使うというような運用でやってるので、すみ分けみたいなことは連携をしっかりとすればできると思う。

～休憩～

（松下：職員）事務局として。図書館より広がったコインランドリーだとか多機能な施設と一緒になるということで、図書館に来るって入り口が広がるんじゃないかっていう話だとか、学校図書館と公共図書館の役割をそれぞれしっかりしていくっていう話は広がりのある意見だと思います。しかし、事務局としては、学校図書館は、また学校図書館としてやっていく部分でもあって、今回はあくまで公共図書館としての、十和分館の検討委員会だと思っているので、公共図書館っていうものの具体的な話も意見として出してほしいと思います。基礎となる部分の意見が案外出ていないのかなと思います。例えば、図書館として自主学習スペースとかも大事ななと思います。四万十町立図書館の本館の学習スペースも小さかったり、なかなか勉強しやすいような広さじゃないと思います。そういった具体的な学習スペースや読書スペースが欲しいですっていう意見だったり、大正分館みたいに幼児が靴を脱いでくつろげるスペースが欲しいですといった図書館機能についての具体的な意見が欲しいです。図書館機能の外側部分の意見が多いなと思いました。先ほどの山本委員の話にもあったように、ご自身のお子さんが卒業しても入りやすいような設計にしてくださいとか、そういった具体的な意見をお聞きできると嬉しいなと思いました。

（田頭委員長）現在、四万十町立図書館の本館も大正分館も、例えば学習室でいうと区切られた学習室というのがないというのが現状だと思います。例えば2、3人で話し合いをしたりとか、そういうことがどちらもできない。なぜならば、図書館全体と一体となった学習室しかないからです。図書館の一部分に机が何台か置かれているという形です。オーテピアだとそこがきちっと区切られていて、個人で学習できたり、一人一人で区切られたスペースに入れるといった部屋も準備されてます。梶原町立図書館は、テーマごとに部屋が仕切られてますが、学習できるかというできない。一般の読書される方と一緒に部屋になってしまうような造りですね。カテゴリーごとに部屋が分かれてるけれども、それは他の方とも一緒になっている。多様性とか、多くの趣向に対応できるようなハード面の話を事務局も聞けると参考になるという話です。

（平野委員）宇和島の図書館に行った時に、雑誌がその月だけじゃなく、バックナンバーも何冊か置かれていて、それがすごくいいなと思ったので、ぜひそういう形でやってもらいたいと思います。例えば子供の科学雑誌とかだったら、その号だけじゃなくて、別の号もあれば研究したいなっていう時とかは参考になるかなと思います。そうじゃなくても、この号を見逃したというのがあるのでそれがすごくいいなと思いました。子供が本を読めるスペースっていうのは、よくあると思うんですけど、そこに母親が読みやすいような本とかを置いておいていただけると、わざわざ自分の本を取りに行かなくても、近くでスッと取れるような、従来とは違うようなスペースのつくり方もご検討いただけたらと思います。

（刈谷委員）ハード面の話で言うと、町立図書館の本館は元々法務局だった建物ですし、大正分館も役場内に併設しているものですし、西土佐分館も役場内に併設されているものなので、元々図書館を作ろうと思って作られた建物ではない。そのため、書庫がないとか、今ある空間を図書館資料を置くために改築したみたいになっていくと思う。先ほど、事務局の方からもありましたが、自習室が担保されている、若い人と子育て世代と高齢者世代のニーズがそれぞれあると思います。子育て世代の人たちは、子供を離せる広いスペースや裸足で歩けたり、ハイハイさせられるスペースがほしい。学生は静かに自主学習するスペースがほしい。高齢者は逆に地べたに座りくたたりするので、テーブルと椅子がきちんとある場所とといったことなど。もしくは話し合いをしたい人もいます。

す。この前、さくと（佐川町立図書館）にも視察に行ってきたんですけど、静かな部屋は奥の方に離れていて、子供の本のスペースは手前の方になっていて、図書館らしいものになっていていいなと思いました。これは文化的施設の時に話が出てたものですけど、バリアフリーっていうのは一番大事だなと思っています。大正分館もバリアフリーのスロープにはなってますけど、スロープがきついので、車椅子で 100%安全にということと言うと、心配があるというところもあります。書架と書架の間を広くするとか、誰もが使いやすいデザインっていうのは大切にもらいたいなと思いました。

（酒井副委員長）先ほどおっしゃられた、公共図書館としてのハード面のことについては、今までの検討委員会の中で結構出してきた話ではあるので、議事録をさかのぼれば、私たちが言ってきたことはそこに載っているのかなという気がします。静かなところをきちんと確保してほしいとか、そういった意見はこれまでに出ています。あとは限られたスペースの中で学校図書館と公共図書館をうまく融合させるか、どうやって揉んで進めて、議会の理解を得られるのか気になります。

（田頭委員長）基本的にこの場で、多様性を重視した趣向に対応できるような、みんなが喜んで来たいような図書館に対する希望や意見を出して、それに基づいて事務局が頑張って作ったものというのは、議会云々ということをまず考えずに、進めたほうがいいんじゃないかなと思います。

（酒井副委員長）壁一面にホワイトボードがある子供の図書館があるんですけど、そこに子供が誰でも自由に書けるようになっているんですね。グーグルの本社も一面がホワイトボードで、そこに書き連ねていたりする。そういう面白みのあるスペースもあるといいんじゃないかなと思います。

（田頭委員長）子供たちが自由に表現活動ができるというものです。

（酒井副委員長）その通りで、大人の方も自分の発想を自由に広げることができるようなスペースがあると嬉しいと思います。

（田頭委員長）昭和小学校は、ホワイトボードミーティングなんかを職員会でやっていた時期があるんじゃないですか？

（山本千代委員）そうですね。すごく好きですね。十和の自然や、四万十川のイメージを感じられるような建物になったらいいなと自分は最初から思っていました。図書館から一歩出たら緑、森林浴でないけど緑が見えて、降りたら外でも本が読めて、木影で本が読めたり、外で屋根を張ってイベントができたり、外の自然に開けたようなイメージの図書館もどうかと思いました。でも、十川小中のある場所ってそれが可能なかなと。下に小さな川があって、向こうに山が見えて、そういうのができたら素敵だなと思いました。降りて行って、川や山を見ながらそこで読みたい本を読んで、その下で子供が遊んでるとか。

（酒井副委員長）（川に続く）階段をつけてください。大正の道の駅もすごく素敵ですよ。桜に囲まれた階段があって最高だと思います。

（栗原委員）私もさく（佐川町立図書館）に行ったんですが、すごくいいなと思った自分のポイントとしては平屋であること。平屋であるからこそ、ユニバーサルデザインというか、どんな人でも行きやすい。確か、子供のエリアだけ段差があったんですけど、それ以外は段差がなかったかなと思います。誰でも利用しやすいものになっていることと、平屋だと階段も上がらなくていいし、2 階建てにするとエレベーターが必要になるとか考えると、平屋がいいんじゃないかなと思います。あとは入口が入りやすいのもそうですが、今の本館や大正分館も入口がすぐには見えないですよ。駐車場から入口がすぐには見えないので、誰でもパッと見て分かるような開かれたところにほしいと思います。あとはゾーニングで、奥に行くと静かな部屋があったり、子供が本を読んだりできるエリアの横に、子供トイレと授乳室があったんですよ。利用者の動線が相当考えられているなっていう、機能がよかったなと思いました。あとは本の並べ方で、本棚の下の方が子供の本、上の方は大人の本で、同じテーマで並べられていた。1 つの本棚のテーマは同じだけど、子供の本と大人の本が同じ本棚で並んですることで、大人もそのテーマに興味があるけど、入りが難しいってときに、子供の本から読んで、大人の本に行けるとか、子供は子供で、大人の本にも手を出しやすい、その本の並べ方がとても良かったなと思ったので、そういう点を取り込んでほしい。ゾーニングの中で、本を読める静かな部屋やイベントができる賑やかな部屋もよかったが、個人的にパソコンで zoom 会議をやっている場所がどこにもなくて、困ることがある。そういったニーズもあるのかと思うので、そういう部屋も何個かあったら嬉しいなと個人的に思います。もう一点、旧小鳩保育所の今の利用者ニーズで言うと、雨の日に子供を走らせたり、過ごせる場所がないので、親御さんが一緒に利用してくれたりするんですが、雨の日にいかにどの世代も利用しやすいかという点も重要だと思っています。

（田頭委員長）先日提出した意見書の 1 番が「新築整備」で出していますが、多くの委員さんが今色々意見を言われていますが、新築整備でないとすべてをクリアすることは難しいだろうなと思います。例えばどこかの施設の改築だと、どうしてもそのクリアできない部分がでてくる。例えば大正分館だと、元々議場だったところなので、3 階にありますし、議場にかかる部分で段差ができていますので、スロープがかなりきつくなっている。奥の議員控室（現：児童図書コーナー）に行くところはなかなか行きづらいですね。本館も法務局だったところなので、とても狭くて使いづらいです。使いやすい有益な施設にするために、「新築整備」を意見書の一番に載せた経緯があると思いますので、ぜひ教育委員会にも汲んでいただきたいなと思います。それから、パソコン云々という話もありましたが、zoom ができるような ICT 機器というのは今、非常に重要な部分でもありますし、機器の活用・使用については、これも現状の四万十町立図書館の管理規則第二条(2)に「視聴覚教育資料を収集し、住民の利用に供すること。」が、もうすでに定められています。視聴覚資料を収集し、住民が利用できるようにすることが、四万十町の管理規則決まっていますので、それに対応するようなスペースというのは当然必要だろうし、機器というのも設置する必要性・重要性というのはあるんじゃないかなと思います。

（平野委員）先ほど酒井委員がおっしゃったことと若干被りますが、利用者同士がコミュニケーションを取れるような、実際に話すとかがなくても、例えばホワイトボードとかがあって、そこに自分が読んでよかった本のちょっとした感

想も貼れたり、それを見た人が面白そうと思って本を手にとるとか。ちょっとした子育て相談とかを、今旧小鳩でもされていてすごい面白いし、子育ての参考になったりするので、利用者同士の直接ではなくて、間接的なコミュニケーションとかがあれば、本だけじゃなくて、ホワイトボードも見てみようかなと楽しみが増えるんじゃないかと思います。

（田頭委員長）来館者がプライバシーを害することなく、緩やかに繋がっていけるようなスペースや工夫ですね。

（刈谷委員）本館のところに、高齢者で目が見えにくい人や、読むことに難しさがある人たちのための補助機器が置かれています。生涯読書推進計画を今、作成中で、生涯を通じて住民の誰しもが読書活動ができるように話し合いが行われています。特に十和には高齢者がたくさんいますので、そういう人たちが利用しに来た時に、「もう目見えんき、本読むの無理よ」って思わないような大活字本を置いたり、そういう補助機器がありますよっていう、誰もが入りやすいウェルカムなところが、図書館案内であったり、蔵書数とかにも反映されていけばと思う。この町内の情報網はすごいので、一人が良かったねと言うと、多分みんな行くようになる。高齢者や高齢者以外の多様性もあるので、バリアフリーの視点は、ハード面でもソフト面でも大切だなと感じています。

（酒井副委員長）そこを目掛けてコミュニティバスが走り出すとか、外部のツールが整備されるとより多くの人が活用できるんじゃないかと思います。あと、室内の空調設備も顔にばかり風が来るので工夫があると嬉しい。

（田頭委員長）新築じゃないとなかなか難しいですが、コミュニティバスについても良さもあるけど、課題もあるので、ここは企画課長あたりが頑張ってくれるんじゃないかと思います。

（平野委員）雑誌か何かで読んだが、その地域の企業を巻き込んで、雑誌を企業に買ってもらって、代わりに宣伝するといった取り組みがある。雑誌の下の部分に「〇〇様にご提供いただいています」みたいな感じでやれば、本当に地域の図書館みたいな感じが出る。また、その会社の人も、自分たちの会社が提供している雑誌だと思ったら、興味も湧いてくるんじゃないかなと思います。小さい地域だからこそ、そういうのができたら面白いなと思いました。

（田頭委員長）官民協力した取り組みであったり、新しいアイデアがあれば、いろんなものを引っ張ってきてもらったらと思います。

（栗原委員）それは多分、かみーる（香美市立図書館）の取組だと思います。雑誌を企業出資してもらって、この雑誌はどこの企業が出資しているっていうのが見てわかるようになっていました。新しい図書館なんですけど、本を行政の予算だけでなく、企業出資してもらうことで、地域につながりも生まれるし、地域にその企業を知ってもらって、その企業の商品も売れる。そういう地域連携みたいなところできてきてほしい。かみーるには飲食スペースがあって、自動販売機か何かの売り上げが本を買う財源になっていて、図書館に戻す形になってるらしいです。そういう形で、そこで生み出したもので、図書館に還元していけたらいいなと思います。飲食していいスペースに自動販売機が1台と、コーヒーメーカーが置かれてて、普通に現金で買う形。そこに高校生がお弁当を持ってきて食べていた

り。だから一日いるですよ。高校生とかって朝来て、お弁当を持ってきて、昼に食べて、そのまま勉強している。日曜日とかは、一日中、学生がいる。栲原もそうですけど、カフェがあって本と飲食が横にあった方が、滞留時間も長くなる。滞在時間が長い方が多くの学びを吸収できると思います。

（田頭委員長）そんな雰囲気、例えば多くの新聞があれば、新聞読みながらコーヒー飲んだりというのはベストですね。新聞の購読料も上がってくる中で何紙か置いていて、その新聞を読みながら、話しながらコーヒーを飲んだりとかいいですね。

（栗原委員）コーヒーも地域のコーヒー屋さんが提供してくれたら、そこにまた循環が生まれますよね。

（田頭委員長）緩やかにそういうことから入って、新聞に気になる記事であったりとか、内容につながる本を探しに行くとか、より専門性のある本につながる、読書につながるってことがあれば。過去の回答の中でもいろいろ意見が出てるので、そこも参考にしてもらいながらということで、他はどうでしょうか。

（栗原委員）栲原は本に全く興味がなくても、建築に興味がある人が来る。そこで集客している部分もある。中国人観光客とかは大体建築目的。だから、十和ならではの鯉のぼりとか、日本中の鯉のぼりが吊るされているとか、十和ならではの図書館の特徴で、図書に全く興味がなくても、それを見に来ますみたいなものがあればと思います。

（酒井副委員長）十和小中学校の校章にも、鯉のぼりがあって、地域で推している。建物が鯉のぼりの形をしていて、建物そのものに魅力があるとか。鯉のぼりの口が開いてて、そこが入口でとか。全国のタコ公園とか、昔建てられた円形校舎も特徴的で、昔はその建物が多かったけど、どんどん少なくなって、今となっては使いづらい部分も多いけど、子供たちにとっては原体験で思い出に残っている。コストはかかるのかもしれないですけど。岐阜のメディアコスモスは建物がとてもいい。書かれているビジョンも素晴らしいものだし、一個ぐらい特徴のあるものがあると良い。以前にも言いましたが、今は禁止のサインじゃなくて、自分で考える、促す、気づきを与えるようなサインを工夫してデザインされている。そういったところからも、子供たちも禁止と言われるより気持ちよく使えるんじゃないかと思います。随所に工夫するには、勉強や視察が必要かと思いますが、いいものを作るためにぜひその辺を検討していただけたら嬉しいと思います。

（田頭委員長）運営・設計やそれに至る協議に関して、松下委員が言われたように、先進施設の視察は非常に必要なんじゃないかということですね。今後、実施設計に入るときに、町内や県内の限られた専門家に頼むのではなく、いろいろ新しい考えを取り入れて、いろいろ建てているような方の設計手法であるとか、アイデアであるとか、そういったものを広く知って、活用していくことが必要なんじゃないかと思います。町内や県内だけでその設計を考えていくと、どうしても古いものになってしまう。契約上のルールなどもあると思いますが、より良いものを、日本で一番いいものを作るぐらいの気持ちで、それぐらいを目指していけたらいいんじゃないかなと思います。手近なところで収めるのではなくて。

（松下委員） いやらしい言い方ですが、メディアに取り上げてもらえるような。先進的なところから学んでっていうバランスのいいものに仕上がるが、振り切った部分がないと。建物やその外観作りも含めて、何か四万十町十和にしかない図書館ができましたよみたいな感じでメディアに売る。メディアに取り上げてもらえれば、旅行客まで来ると思う。そうすると地域の人も嬉しい。そういうメディアに取り上げてもらえるような特色を持った部分が一つでもあれば。子供たちも、テレビに出た図書館が僕たちの町にあると誇りになる。この町の子供たちにそういう誇りを持たせてあげたい。この町にこんなものがあると、この子供たちがそこから育って、東京に行った時でも、「うちにはこんなもんがある」という、誇れるプライドができる。それは子どもの教育には大きいと思います。すべてが東京、大阪に負けてるだけで終わってるんじゃなくて、「これは誇れる」というものを作ってあげると、子供たちにとってはいいんじゃないかと思います。

（田頭委員長） 十和の自然を生かしたとか、内と外が繋がるようなといった意見も出てましたけど、こじんまりとまとまって整理されたものというよりか、どこか外したような面白さが自慢できるといったようなものができたら、というようなことだと思います。それもいろんな設計とか、考えるアイデアを持っている人じゃないと、なかなか浮かんでこないところもあるんじゃないかなというふうに思います。

（栗原委員） 本棚の配置はこだわってほしい。また、さくと（佐川町立図書館）の話になって申し訳ないが、さくとは無意識に館内を歩くと回遊できる。どこに行くにも行きやすい造りになっているのと、本棚の高さも恐らく相当計算されていて、すごく抜け感があって気持ちいい視点と、本棚が高いから、自分に意識を向けられるエリアが外側にある。真ん中にある本棚の配置と、回遊できるように丸く本棚が並べてあるから、自然と情報に触れに行けたので、本棚の配置と高さはすごく大事なんではなかろうかと思いました。

（田頭委員長） それではそろそろ時間となりましたので、これで本日の会議は終わりたいと思いますが、事務局から何かありますか。

（松下：職員） 4 回という限られた会でしたが、皆さんの様々な意見をお聞きすることができました。今後、整備にあたって、皆さんの意見を一つでも多く生かしていけるように事務局として頑張っていきたいと思います。今後もしよろしくお願いします。ありがとうございました。

（富田局長） 皆さん、全 4 回お疲れ様でした。ありがとうございました。こういった施設、どうしても来館者やものさしで測られるんですけど、今日の意見なんかも聞いていくと、そうじゃなくて、学校図書と一緒にすることで、いろんなメリットとかがあって、しっかりその辺りを整理しながら、単純に数だけの問題ではない、いかにこの施設が、地域のためのものになっていくのかっていうところを、計画の段階から進めていく必要があるということを改めて思いました。いろんな意見が出て、すべてのニーズに応えるのは難しいと思います。その中でいかに目的とする部分を達成していくものになるのか。訴求力が高いものとして選択するなら、どれを選択するのか。そういったところをしっかりと見極めていく必要があるのかなと思います。ここに来れば、いろんな情報が人から入るというようなことと言えば、例えば週に 1 回ぐらいは局の職員が行って、そこに座ってみるとか考えてもいいのかもしれないです。学校図書と一緒にすることは、月曜日が休館だと都合が悪いのかもしれないですし、コミュニティバスなんかも休みは土日で、そういったとこ

ろを擦り合わせていかないと、問題がたくさん出てくると思います。いろんな条件をテーブルに乗せながら、より良いものになるように、これから事務局側で設計をしていくようになると思います。またそれに対して、事あるごとに情報として住民の皆さんに出しながら、公聴会であったり、パブコメであったり皆さんの意見を聞く場が随時出てきますので、その際はまたご意見いただけたらと思います。何はともあれ、今回これで最後ということになりました。本当にこれまでお世話になりました。ありがとうございました。

（田頭委員長）では、十和分館のロビーで会えるのを楽しみにしています。これで終わりたいと思います。お疲れ様でした。

以上